

寄稿論文

ウェルネス・ツーリズムの進展

—現代ツーリズムの新しい1つの動向—

Development of Wellness Tourism: A New Trend in Modern Tourism

大橋 昭一

Shoichi Ohashi

和歌山大学国際観光学研究センター

キーワード：ウェルネス・ツーリズム、メディカル・ツーリズム、ヘルス・ツーリズム

Key Words：wellness tourism, medical tourism, health tourism

Abstract：

There has been a new trend in modern tourism, the name of which is wellness tourism, which is a counterpart of medical tourism and has specially been called “wellbeing tourism” in the Nordic countries. This paper surveys the developing process and argues it reflects an emerging phenomenon of transmodern era.

I. 序—ウェルネス・ツーリズムとは何か

ここでいうウェルネス（wellness）とは何かについて、前書き的に一言すると、身体的健全さを中軸にして健康な生活をおくことをいう。そしてウェルネス・ツーリズム（wellness tourism）は、そうしたウェルネス状態の確保・向上を意図するツーリズム行為である。こうしたウェルネスが人間生活の中心に置かれるべきという主張が世界的に高揚したのは、概ね 1900 年代の末ごろからである（G2, p.10）。

すでに 1977 年にアメリカでは「全国ウェルネス研究所（National Wellness Institute：NWI）」が設立されている。ただし、この研究所のウェルネスの定義はかなり広く、「ウェルネスとは、人々がより成功した存在（a more successful existence）となることを認識して、そのための選択的行為を積極的に行うプロセスをいう」となっている（cited in G2, p.10）。

その後、ウェルネス増進のための運動は世界的に組織されたものとなっており、近年では「グローバル・ウェルネス・サミット（Global Wellness Summit）」が毎年開催されている。直近では 2016 年 10 月 17 日～19 日に第 10 回大会が、オーストリアのチロル地方、キッツビューエルで開催され、約 500 人の参加者があった。この 2016 年サミットの資料によると、少なくとも同サミットでウェルネスといわれるものには、次の 10 種のものがあり、2015 年の世界の年間扱い高は、表 1 の通りであった。

表 1：ウェルネスの種別と年間扱い高

種 別	2015 年扱い高 (億USドル)
①美容・老化対策（beauty & antiaging）	9,990
②健康のための栄養・体重コントロール (gesunde Ernährung & Abnehmen)	6,470
③ウェルネス・ツーリズム（wellness tourismus）	5,632
④フィットネス・ボディマインド (fitness & body-mind)	5,420
⑤疾病予防（prevention）	5,343
⑥補足的または別種の医療 (komplementäre & alternative Medizin)	1,990
⑦ウェルネス・ライフスタイル用不動産 (wellness lifestyle real estate)	1,186
⑧スパ産業（spa industry）	986
⑨温湯浴や他の水浴 (Thermal- & andere Bäder)	510
⑩勤務場所ウェルネス（workplace wellness）	433

出所：W, p.3.（カッコ内原語は原書のまま）

また同サミットの資料によると、ウェルネス・ツーリズムでは、ツーリストあたりの支出額は、2015 年の場合、ヨーロッパ平均で約 958 ユーロであった。これに対し一般的通常のツーリズムでは、それが約 615 ユーロで、ウェルネス・ツーリズムでは、5 割ほど多いものとなっている（W, p.3）。付加価値が高いのである。

本稿は、ウェルネス・ツーリズムをめぐる諸問題の考察を課題とするが、最初に、ウェルネス・ツーリズムとは何か、特にメディカル・ツーリズムとはどのような点で異なるかに視点をおき、ウェルネス・ツーリズムに関する論考では古典的なものとして評価が高い、スイス・ベルン大学のミュラー（Mueller,H.）とカウフマン（Kaufmann,E.L.）の2001年の論文を取り上げる。これは、直接的にはスイスを対象にしたものであるが、執筆者自身の弁によれば、広範に用いられている“ウェルネス”という言葉について、“治療（cure）”という言葉と区別して定義を試みた、ドイツ語圏では最初のものである（M1, p.11）。

ちなみに、フィンランド・イースタン大学のコヌ（Konu,H.）とツオヒノ（Tuohino,A.）およびハンケン経済スクールのビヨルク（Björk,P.）は、後述の2011年の『フィンランドにおけるウェルビーイング・ツーリズム』（文献N2）において、「ヘルス（health:健康）とウェルネスとは新しい事柄では全くないが、しかしツーリズム文献では今日になって初めて取り上げられることになったばかりのものである」（N2, p.6）と書いている。

本稿は、内容を先にいえば、全体的には北欧中心的な論述のものであるが、しかし温泉やサウナ等を中核にしたウェルネスもしくはウェルネス・ツーリズムの取り組みは、ヨーロッパでも、ドイツ、ハンガリー、イタリア、ポルトガル、スペインなど多くの国で盛んである。このうち例えば中欧・南欧諸国を対象にした文献に、スペインのペリス＝オーチツ（Peris=Ortiz,M.）／エルヴァレツ＝ガルシア（Álvarez=García,J.）編の2015年の著『ヘルス・ウェルネス・ツーリズム:新しいマーケットセグメントの登場』（文献P）がある。

しかし同書では、ウェルネス・ツーリズムとヘルス・ツーリズムとを特段に区別しないで、“ヘルス・ウェルネス・ツーリズム”として両者一体のものとしてとらえている。こうしたこともあり、本稿では本格的に取り上げてはいないが、同書によると、これらの諸国では第二次世界大戦後、温泉など自然関連療養施設を土台とするヘルスケアにおいて民主化（democratization）が起き、人々のウェルビーイング（wellbeing:この用語の意味については本稿で後述）と生活の質（quality of life）において向上がもたらされているといわれる。そして“ヘルス・ウェルネス・ツーリズム”は、現在進展を続けているツーリズム産業のなかでも、ひととき急速に成長している分野と特徴づけられている（P, p.v; p.vi; p.23; p.35）。

なお、参照文献は末尾に一括して記載し、典拠箇所は文献記号により本文中で示した。

II. ウェルネス・ツーリズムとメディカル・ツーリズム

1. 区別の提唱

ミュラー／カウフマンが目下（2001年当時）最も重要な課題としていることは、ウェルネス・ツーリズムとメディカル・ツーリズム（medical tourism）との相違を明らかにし、もってウェルネス・ツーリズムの概念を明確にしておくことである。この場合強く注目さ

れることは、ミュラー／カウフマンが、このことはウェルネス・ツーリズムのマーケティング上において肝要なことであるとし、何よりもウェルネス・ツーリズムとメディカル・ツーリズムとがマーケットセグメント上において異なる特色をもつものであることを強調していることである。

それ故、その所論は需要（demand）と供給（supply）の側面とに分けられているが、メディカル・ツーリズムと異なるウェルネス・ツーリズムの独自性は、何よりも需要側面にあるという主張になっている。この点についてミュラー／カウフマンは、「ウェルネスのための休日が欲しいという需要についての情報が、今日では不十分なために、（ウェルネス・ツーリズムの）供給側ではどのような設備やサービスを用意すべきかについて決めることが容易ではないものになっている」と述べている（M1, p.2:カッコ内は大橋のもの、以下同様）。

この場合ミュラー／カウフマンは、概念設定において2段階で行うことを良しとし、概念の基本設定レベルと、その調整的レベル（demarcation）とに分けている。前者の基本設定レベルでは、それまでの種々な論者による概念設定の試みに依拠して、自らの概念について定義をするよう試みている。

まず土台となるウェルネスの概念について、その規定の試みはアメリカの論者、ダン（Dunn,H.L.:文献D）の1959年の試みに始まるとされている。ダンによれば、ウェルネスとは要するに、「身体的に健康な状態にあり、その人が、環境のなかにおいて、身体（body）、精神（spirit）、心（mind）において健全なこと」をいうものであり、かつ「この点で個人的に満足が大きな状態の場合、ウェルネスも高いレベルにあるといえる」と規定されているところを引用している（D cited in M1, p.2）。

この場合さらに、直接的にはアーデル（Ardell,D.B.:文献A1）の定義に基づき、ミュラー／カウフマンとしては、ウェルネスとは「自己責任性、肉体的フィットネス・美容性、健康のための滋養性・ダイエット性、ストレス解放のためのリラックス性、知的活動と教育および環境感受性と社会的交流を基礎的要因とするところの、身体・心・精神の調和を特徴とする健康の状態（state of health）」と定義されるものとしている。いうまでもなくこれは、ダンの「身体・精神・心において健全」という根本理念を引き継いだものである。

このうえにたってウェルネス・ツーリズムの定義としては、ミュラー／カウフマンは、ドイツ語圏の著名なツーリズム論者カスパー（Kasper,C.:文献K）の定義に依拠し、「ウェルネス・ツーリズムとは、人々が自らの健康の維持や向上を意図して行うところの、旅行（journey）と滞在（residence）から生まれるすべての関係と事象の総体をいう」と定義されるとしている（M1, p.3）。この定義の後半の「旅行と滞在から生まれるすべての関係と事象の総体」という考え方は、カスパーのツーリズムの定義に基づくものであるが、ここにはウェルネス・ツーリズムが、単に旅行ばかりではなく、滞在を重視するものであることが明示されている。もっともツーリズムにおいて旅行先での滞在を重視

するのは、Fremdenverkehrといわれたドイツ語圏ツーリズム論の伝統的な考え方である（詳しくはΩ1:Ω2）。

以上のうえにたつてミュラー／カウフマンは、ウェルネス・ツーリズムとメディカル・ツーリズムについて、その需要面と供給面の事情を考えると、ツーリズム全体のなかにおける位置づけについて、これを図1のように理解すべきものと提議している。これによると、まずツーリズムの大枠の種別の1つに「ヘルス・ツーリズム」があり、それが次に、「疾病の治療にあたるもの」と「疾病の予防にあたるもの」とに分かれる。前者が「メディカル・ツーリズム」である。後者はさらに「(特定の疾病の予防を意図するところの) 個別的ヘルス・ツーリズム」と「(全般的なウェルネスの向上を意図するところの) ウェルネス・ツーリズム」とに分かれる。

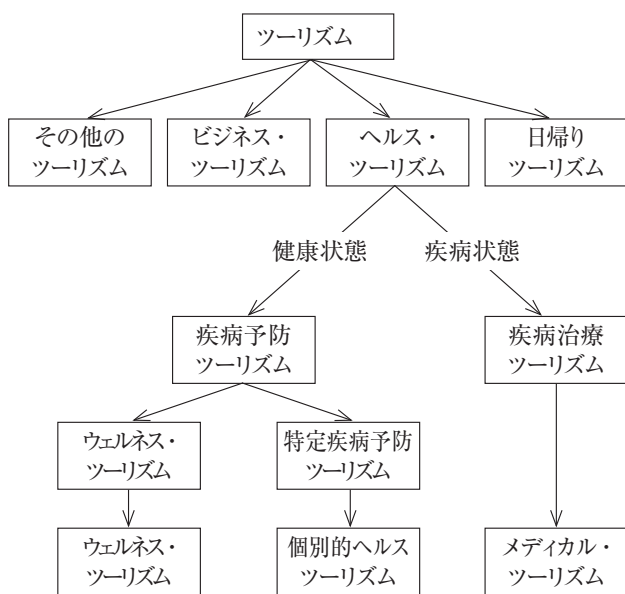


図1：ツーリズムの種別（出所：M1, p.4）

この場合、「疾病予防ツーリズム」では、「個別的ヘルス・ツーリズム」と「ウェルネス・ツーリズム」とが実際には明確に区別されないことがある。というのは両者は、もともとはいずれも「健康状態の者」が希望するものであり、供給側においても特段に区別され難い場合が多いからである。供給側が医療機関の場合には、さらに「メディカル・ツーリズム」との区別も不明瞭になる場合がある。それ故、需要側において、少なくとも「ウェルネス・ツーリズム」と「メディカル・ツーリズム」とを明確に区別しておくことが望ましいし、必要になる。

以上のうえにたつてミュラー／カウフマンが行ったスイスにおける実態調査によると、まず供給側では、星が3から5のホテルの場合、ウェルネスに特段に注意を払っているものが約4割あった。その多くでウェルネス用品として考えられていたものは、サウナ、サナトリウム、フィットネス・スポーツ設備、スチームバス、水泳プールなどであったが、総括的には、ウェルネ

ス志向的といわれるホテルには概ね次の4種があるとされている。

- ① ソフトウェア・ホテル：ウェルネスのノウハウや情報提供等に重点があるもの。
- ② ハードウェア・ホテル：ウェルネス用具の設置面での充実に重点があるもの。
- ③ 擬似的（fake）ウェルネスホテルというべきもの：ウェルネス用具があるだけで、その実際的使用については考慮が低いもの。
- ④ 本来的には治療機関というべきもの。

次に、需要側すなわち顧客側をみると、ウェルネス全般を提供している8つのホテルにおいて400人以上の宿泊客についてアンケート調査したところ、平均宿泊数は8日間であったが、滞在目的がリクリエーションと答えたものが約半数、健康維持・向上が約20%、病気療養もしくは疾病治療が約15%であった。これはミュラー／カウフマンのみるところ、スイスのホテルの長期滞在客の大体の姿であるが、このうえにたつて需要側について、次の4種に大別するのが望ましいとされている。

- ① 通常的なリクリエーション志向的で特段にウェルネス希望はないもの（undemanding recreation guests）。
- ② 一般的に健康の保持・向上を求めているもの（demanding health guests）。
- ③ ウェルネス用品や設備を個人的に大いに使用したいと思っているもの（independent infrastructure users）。
- ④ 病気療養に専断的にあたりたいもの（care intensive cure guests）。

最後にミュラー／カウフマンは、再度、ウェルネス・ツーリズム事業にとって最も肝要なことは「ウェルネス」と「病気の治療・療養」とを概念上明確に区別しておくことであると力説し、結語としている（M1, p.12）。

このようにミュラー／カウフマンは、メディカル・ツーリズムとの対比で、ウェルネス・ツーリズムの必要性を力説しているが、その後、メディカル・ツーリズムとウェルネス・ツーリズムとの相違を強く前面において論議しているものの、2011年の「グローバル・スパ・サミット（Global Spa Summit）」に提出された報告書『ウェルネス・ツーリズムとメディカル・ツーリズム：スパがフィットするのはどちらか』（文献G2：以下では『2011年グローバル・スパ・サミット報告書』という）がある。

この報告書の執筆者は、グローバル・スパ・サミット委託専門研究者であるジョンストン（Johnston, K.）、ブダペスト・コルヴィネス大学のプスティコ（Puczkó, L.）とスミス（Smith, M.）、および「グローバル・スパ・サミット」の代表者ともいえるエリス（Ellis, S.）である。次に、この報告書におけるウェルネス・ツーリズムとメディカル・ツーリズムとの相違にかかわる部分を、補足的に簡単にみておきたい。

2. 区別の強調

『2011 年グローバル・スパ・サミット報告書』は、もともとメディカル・ツーリズムとウェルネス・ツーリズムとの違いを種々な点や領域について明らかにし、関係者の理解を明確にし、深めることを目指したものである。このことは、同報告書執筆者チームによると、何よりも「メディカル・ツーリズムとウェルネス・ツーリズムとが、今現在、急速に生成中であり、かつ発展中のものであるが故に、必要である」(G2, p.ii)。このために同報告書執筆者チームは、12 개국でケーススタディを実施したのをはじめ、関係専門家とのインタビューや意見聴取を行っている(G2, p.iii)。

この結果同報告書執筆者チームは、メディカル・ツーリズム部門とウェルネス・ツーリズム部門では、何よりもマーケット上で違いがある。それにもかかわらず、現実の規定やとらえ方においては混同があるから、両者を明確に別のものとして理解すべきことが肝要と強調している。その場合、両者は厳密には次のように定義されるものとする(G2, p. iv ; p.114)。

「メディカル・ツーリズムは、病気(disease)、疾病(ailment)、病気状態(conditions)の故に手当をうけるため(自宅以外の)他の場所に旅行する者、および、医療について費用の低い所や、より高度な医療あるいは医療アクセスの良い所、または異なった医療を受けるために、(自宅以外の)他の場所に旅行する人々のことをいう」。これに対し、

「ウェルネス・ツーリズムは、自らの健康やウェルビーイング(wellbeing)の維持や増進のための活動を自ら率先して(proactively)行うために、(自宅以外の)他の場所に旅行する者や、自宅ではなしえない独特な、本物的(authentic)あるいは土地のいかに依存する経験を求めて旅行する人々のことをいう」。

要するに土台をなすものが、メディカル・ツーリズムでは疾病への対処であるのに対し、ウェルネス・ツーリズムでは健康の維持・増進であるというのであるが、メディカル・ツーリズムかウェルネス・ツーリズムかのいかんは、「あくまでも旅行者の特性や旅行目的に依存するものであって、旅行先のいかににより決まるものではない」と強調している。

さらにこの両者に対していえば、“ヘルス・ツーリズム”という用語は、メディカル・ツーリズムやウェルネス・ツーリズムのような明確な分野を指すものではないから、専門的には使用しないことが望ましいとしている(G2, p.5)。

ただし、メディカル・ツーリズムもウェルネス・ツーリズムも、他分野とくらべると、データなどにおいてはるかに不十分という場合が多い。しかし両分野をくらべると、一般的通常的には、例えば公的サポートなどは、メディカル・ツーリズムの方が多く、組織的にも1つの分野として確立している場合が多い。故に研究データでもメディカル・ツーリズムの方が豊富という場合が多い。これに対しウェルネス・ツーリズムでは、それが何を指し、どの範囲のものをいうかについてすら不確定という国や地方が多い。

ちなみにこの点について『2011 年グローバル・スパ・サミット報告書』では、「ウェルネス・ツーリズムの進展はスパの発展いかに依存する度合いが極めて高い」としつつも、ウェルネス・ツーリズムの提供品についてどこに重点があるかは、それぞれの国や地方により異なるとしている(G2, p.v)。

この点についてみると、ウェルネスそのものについても、本稿冒頭で紹介しているように、アメリカでも「全国ウェルネス研究所(NWI)」のように、これを実に広く解しているものもあれば、ダンのように「身体的に健康であって、身体・精神・心において健全」と定義しているものもある。

2006 年に『ウェルネス・ツーリズム・ガイドブック』(文献 J)を出しているヤギヤッシー(Jagyasi, P.)は、「ウェルネス・ツーリズムとは人々が自分の健康やウェルビーイングを良くしたり、さらに向上させるために、特定された旅行を行う旅行者のプロセスをいう。その場合ツーリストは、様々な健康増進的な身体活動、リラクセス化の諸方法および健康に良い食事を包括したものをバックとして与えられるような特定の旅行地に滞在するものである」と定義している(J cited in G2, p.12)。

このヤギヤッシーの定義で注目されることは、目的として“ウェルビーイング”が“健康”と並んで挙げられていることである。そしてそれが、既述のように例えば『2011 年グローバル・スパ・サミット報告書』におけるウェルネス・ツーリズムの定義に反映している。ではウェルビーイングとは何か。

ウェルビーイングは、象徴的には、2010 年代スウェーデン、フィンランドなどスカンジナビア諸国で行われたウェルネス・ツーリズムの概念規定において、中核的概念として登場したものである。これらの諸国では、一言でいえば、ウェルネス・ツーリズムは、“ウェルビーイング・ツーリズム”として提起されている。

その代表的な所論には、2011 年に「ノルディック・イノベーション・センター(Nordic Innovation Centre: NICE)」から刊行された『ノルディック・ウェルビーイング・ツーリズムのイノベーションと再ブランド化: ノルディック・イノベーション・センター研究プロジェクト最終報告書』(文献 N1: 以下では『ノルディック報告書』という)、および、同じく2011年に同センターから刊行された、この書のいわばフィンランド版というべき『フィンランドにおけるウェルビーイング・ツーリズム: 競争的ウェルビーイング・ツーリズム目的地としてのフィンランド』(文献 N2: 以下では『フィンランド報告書』という)がある。

執筆者は、前者の『ノルディック報告書』では、南デンマーク大学のヒャラーガー(Hjalager, A.)、アイスランド・アクレイリ大学のフジベンス(Hujibens, E.H.)、スウェーデン・ウップサラ大学のノルディン(Nordin, S.)、ノルウェー・マネジメントスクールのフラゲスタット(Flagestad, A.)、フィンランド・イースタン大学のコヌとツオヒノおよびハンケン経済スクールのビヨエルクである。後者の『フィンランド報告書』では、既述のように、上記のうちのフィンランドの研究者3名である。両報告書は、対象範囲が異なるが、執筆者で重なる者があることからみても基本的には同一の趣旨のものと考えられる。以下ではこれらを統合的に指す

場合には、「ノルディック・ウェルビーイング・ツーリズム論」という。

Ⅲ. ウェルビーイング・ツーリズムの提唱

1. 概念設定をめぐる

「ノルディック・ウェルビーイング・ツーリズム論」の特色は、何よりも、一般に「ウェルネス」および「ウェルネス・ツーリズム」といわれているものを、「ウェルビーイング」および「ウェルビーイング・ツーリズム」とよぶところにある。まず、「ウェルネス」と「ウェルビーイング」とはどのように異なるのか。

この点について『フィンランド報告書』は、「ウェルビーイングが心の状態 (a state of mind) をいうのに対し、ウェルネスは（そうした心の状態を実現するために）提供されている具体的な産物やサービスを示す言葉」と規定し、つづいて、この点は文献のいかんにより異なるものとして、「文献によると、これは、ツーリストの期待が、ウェルビーイングの全体的な (holistic) 状態の達成にある場合、その期待を充たすのに必要な産物とサービスが、公正でオープンな形であるような状態をいう」と提議している。

この場合同書によると、ウェルビーイングはもともと、いくつかの概念を包括する1つのアンブレラ用語 (an umbrella term) であり、定義的には「ウェルビーイングとは、身体・心・精神において積極的な健全性があることをいう、多次元的な状態 (a multidimensional state) をいう」。ただしその場合同書は、「ウェルビーイングは個別的な事柄ではあるが、しかし周囲の環境とコミュニティのウェルビーイングのあり方と合致してのみ示されるもの」と付言していることが注目される (N2, p.9ff.)。

すなわちこれは、サステナビリティ (sustainability) の考えに通じるものである。この点について『フィンランド報告書』は、2008年に「フィンランド・ツーリスト・ボード」が示した『フィンランド・ウェルビーイング・ツーリズムの指針』には、「フィンランドはウェルビーイング・休息・リラックスを提供できる国として知られているが、その提供するウェルビーイングは、明確に確定されたものであって、マーケット性があり、かつ、サステイナブル・ディベロップメントの考えに立脚した方法で仕上げられたものである」と規定されているところを引用している (cited in N2, p.27)。

さらに留意されるべきことは、スカンジナビア諸国では、ウェルビーイングについてそれを何よりも「ノルディックなもの」として統合的に提示するよう志向していることである。これは端的には「ノルディック・ウェルビーイング」といわれるものであるが、この観点から事柄を論じている『ノルディック報告書』によると、ノルディック・ウェルビーイングとは、何よりもまず、地理的に区画づけられたものであり、提供する産品とサービスの特性、およびマーケティングとブランディングの仕方において、他国や他地方のそれとは区別されたものとして受け容れられることを目指すものである。その場合、ノルディック・ウェルビーイングにおいてブランディングの土台となるイメージは、典型的には次の

諸点に、すなわち自然の大きさ、屋外活動経験、健康的でローカルな食事に基づく楽しみ、ローカルな文化・雰囲気・自然・水の楽しみにあるとされている (N1, p.10)。

以上のうえにたつて『ノルディック報告書』では、ウェルビーイングの概念規定に関連して、次のようなコメントがなされている。第1にウェルビーイングは、ヘルス (health) とウェルネスに関連してはいるが、しかしウェルビーイング・ツーリズムは、一方では単なるヘルスケア・ツーリズムとは異なるし、他方ではメディカル・ツーリズムとも異なることが改めて強調されている。ところがスカンジナビア地域でも多くの所では、ウェルビーイングという言葉は日常用語上において特定した意味で用いられているものではない。こうした事情もあって、時にはウェルビーイング・ツーリズムの定義が不明確になって、“ヘルスケア・ツーリズム”あるいは“メディカル・ツーリズム”と同義的なものとして使われ、定義上で混乱をもたらすことがあるとされている。

第2に、もともとウェルビーイングには、私的側面とともに、社会的側面があり、このことが充分考慮されるべきことが強調されている。すなわちウェルビーイングは、確かに直接的には個々の人間の主観的な個人的条件や好みの志向から生まれるものであるが、しかし他方それは、本質的には、社会的諸条件、例えば社会的な物質的諸関係や活動の諸関係のもとにあるものであり、コミュニティのなか、社会的関係のなかで決まるものである。故にウェルビーイングは、個人的側面と社会的側面との全体において (holistic) 考えるべきものであることが強調されている。上記のようなウェルビーイングにおけるサステナビリティ性の主張等は、直接的にはこうした観点から来るものと思われる。

2. 実践上の諸問題

2011年の『ノルディック報告書』の場合、中心的な問題意識は、同書の書名がもともと、既述のように『ノルディック・ウェルビーイング・ツーリズムのイノベーションと再ブランド化』とされているところからも読み取れるように、ノルディック・ウェルビーイング・ツーリズムの実践的革新を提起するところにあった。

そこで同書は、これまでのそれを端的には“pampering”（顧客のいう通りに手厚く扱うこと、以下本稿では「パンパリング」という）といわれるものであったが、これを、顧客の真の願いを満たすものとするように革新し、「ノルディック・ウェルビーイング・ツーリズム」としてブランド的に確立することが課題であるとしている。

このことを同書は、「伝統的概念におけるウェルネスは、今や急速に矮小化されたものとなっており、これまでのパンパリングという単純な形態から、より複雑な需要に応えるものへ移行することが必要」と位置づけ、このことは、換言すれば、新しい意味におけるウェルビーイングを求める顧客を理解し、その需要に応えることをいうものであり、「このことが今や個々のツーリズム事業やツーリズム目的地の双方にとって喫緊の課題になっている」と訴え、そして「これがヘルスとウェルビーイン

グの新しい需要形態である」と提議している (N1, p.17)。

しかし、スカンジナビア諸国で行われたこの試みは、必ずしもスムーズにはゆかなかった。例えばツーリストのなかには、とにかく旧来の方法をよしとする「保守的な」態度のものもあり、ケーススタディ的にみると、さらに次のような状況もみられた。例えばアイスランドのケースでは、ウェルビーイング・ツーリストが全く受け身的な態度に終始するものとなって、言われることしかないようになった場合があった。つまり、ツーリストがかえって主体性をなくし、受動的なものとなってしまったのである。

逆にノルウェー・ベイトステレンのホテルの場合のように、ウェルビーイング概念を拡大し、メディカルな面も入れて充実し、成功した例もあった。ベイトステレンはもともと冬季用リゾート地として知られてきたものであるが、あるホテルにおいて年間を通じて来訪客のあるよう、例えばリハビリ用具をおいたり、食事を工夫して、年間を通じてウェルビーイング・ツーリストがあるようにして成功したものである。「これはまだ“完全なウェルビーイング・ツーリズム先”とは言えないが、旧来のパンパリングを超えた新しいウェルビーイングの提供を試みている注目すべき例である」と評されている (N1, p.20)。

しかしこれらを総括し、『ノルディック報告書』は、「包括的・全体的なウェルビーイングという理念は、ノルディックにおけるツーリズム提供物の展開において達成されていると考えることはできない」と結語し、「この現状を打開するために、ノルディック諸国は、ツーリストにより多くの種別のものを提供するようすべきであり、そのためにはこれまでの、かなり利己中心的な (egocentric) パンパリング的なウェルネスの考えを超えたところの、ウェルビーイングに進む」ようにすべきであると論じ、その有力な1つの考え方としてウェルネスの社会的側面に重点をおくよう変革を進めることを推奨している (N1, p.20ff.)。ここで社会的側面とは、既述で一言したものであるが、最も簡単には、純粋な医療行為が、本来、患者一人ひとりを対象とするものであるのに対し、ウェルビーイングではいく人の人が一緒に、社会的にオープンな雰囲気なかで行われることが有用といわれることに立脚するものである。

他方、『フィンランド報告書』では、同国のなかでウェルビーイング・ツーリズム活動が比較的盛んな、スウェーデン対岸のヴァーサ地方にしても、ウェルビーイング・ツーリズム活動としては、まだ端緒段階にあり、2011年段階では「地域的なウェルビーイング・ツーリズム戦略をサポートするような地域的な政策や計画は、現在のところ、まだない」と論評されるものであった (N2, p.24)。

つまりこれらの報告書によると、スカンジナビア諸国ではウェルビーイング・ツーリズムの進展のための資源は充分にある。「足りないのは、それに最適なネットワークと協働体制のためのイニシャティブである。というのは、(少なくとも同地域では) 単独のツーリズム事業体では、包括的なウェルビーイング・ツーリズムのパッケージを生み出すことができないからである。というよりは、そ

うした(力をもつ)単独の事業体が存在しないからである」と論評されるものであった (N2, p.24)。

注目されることは、このうえにたつて『フィンランド報告書』では、フィンランドを「サステナブル・ウェルビーイング・ツーリズムの目的地」として形成することが提議されていることである(サステナビリティについて詳しくはΩ5:Ω6参照)。

3. サステナブル・ウェルビーイング・ツーリズムの提起

『フィンランド報告書』が前提とするサステナブル・ウェルビーイング・ツーリズム目的地のフレームワークは、もともとリッチー (Ritchie, J.R.) / クラウチ (Crouch, G.I.) により提示された「ツーリズム目的地競争力モデル (model of destination competitiveness: 文献R1) に立脚し、それをサステナブル・ウェルネス・ツーリズム・モデルとして提起したシェルドン (Sheldon, P.) / パーク (Park, S.-Y.) のモデル (文献S1) に依拠したものである。シェルドン / パークのモデルは、大綱的には、図2のように示されるものである。

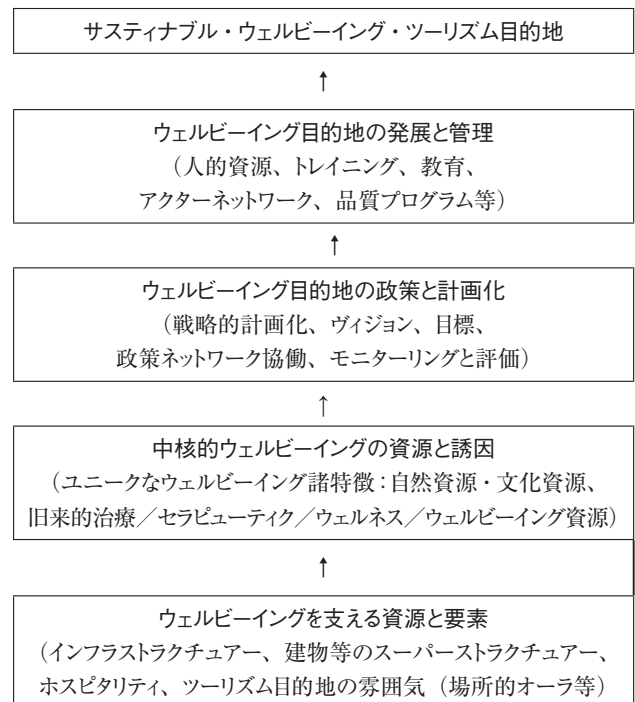


図2: サステナブル・ウェルビーイング・ツーリズムの5段階

(出所: N2, p.14)

まず、(下から) 第1段階目の「ウェルビーイングを支える資源と要素 (supporting wellbeing resources and factors) は、インフラストラクチャーや、外来者などに対する当該場所の接遇の良さなどをいうが、『フィンランド報告書』では、これは正確には「ウェルビーイングの1つの次元 (a dimension) としてのウェルネス」と規定されるもので、ホテルやレストランなどについてハード面とソフト面の双方を総合して示すものである。

第2段階目の「中核的ウェルビーイングの資源と誘因 (core wellbeing resources and attractions)」は、自然環境など中核的資

源のあり様をいう。資源そのもの（ハード面）と、それを楽しめる度合い（ソフト面）などをいい、スカンディナヴィア諸国ではサウナなどもこれに入るとされることが多い。これについて『フィンランド報告書』は、「ヘルス・フィットネス活動」と「バンパリング」とを区別することが望ましいとしている。前者は、スポーツ的ではないが紀律のあるハイキングやウォーキング、水泳などをいい、後者は、これらについて顧客の自由気ままにさせるものである。『フィンランド報告書』によると、国際的に一般的に「ウェルネス活動」といわれるものには後者をいう場合が多いが、フィンランドでは、それは実際には存在しないもの（no actual wellness offering）と宣している（N2, p.26）。

第3段目の「ウェルビーイング目的地の政策と計画化（well-being destination policy and planning）」では、『フィンランド報告書』は、まず「ウェルビーイング・ツーリズムは、フィンランド政府から提示されている全国的戦略において出発点の位置にあるもの」と宣し、「このことが国際市場におけるフィンランド・ウェルビーイング・ツーリズムの戦略展開において指導原理になってきた」と確認している。ただし「フィンランドのウェルビーイング・ツーリズム戦略は、ごく最近のものであり、その実践は目下進行中のものである。外国市場向けの、これまで以上に包括的なウェルビーイング用の製品とサービスを開発・展開することについて計画が進められているものである」と述べている（N2, p.26）。

第4段目の「ウェルビーイング目的地の発展と管理（wellbeing destination development and management）」では、フィンランドの場合、ウェルビーイング・ツーリズムのための新しいツーリズム地の開発、すなわちウェルビーイング・ツーリズムの量的拡大は考えられないから、これまでのツーリズム地をウェルビーイング上でより有効に活用すること、すなわち質的向上が必要というものである。故にさしあたりツーリズム目的地の発展と管理として実質上主たる課題となるものは、ツーリズム従事者の人的能力の向上、それによる提供サービスの質的向上にあると提議している。

第5段目すなわち最高段階は「サステイナブル・ウェルビーイング・ツーリズム目的地（sustainable wellbeing tourism destination）」の実現であるが、この点について『フィンランド報告書』は、そもそもウェルビーイング・ツーリズムは、例えばアルプス・ツーリズムやフィッシング・ツーリズムのような具体的態様を指すものではなく、ウェルビーイングというツーリストの知覚状態で示されるだけのものであることが注意されるべきことであると指摘している。それ故それは、例えばフィンランド・サウナの体験といった形で示されるだけのものであるが、それについてサステイナビリティの原理に合致したものであることが要請されると論じている。

ここで『フィンランド報告書』は、「ツーリズム目的地提供品（destination product）」とは何かについて、マーフィ（Murphy, P.）らの規定（文献 M2）に依拠して、図3のような3重構造をなすものと提議している（cited in N2, p.28）。この場合「ツーリズム目的地環境（destination environment）」とは、自然環境など各

種の環境をいう。「サービスインフラストラクチャー（service infrastructure）」とは宿泊・食事・交通はじめ各種リクリエーション施設などの充実度をいう。「ツーリストの目的地体験（tourist destination experiences）」とは、例えばツーリズム地のアトラクション的なものにおいて、ツーリストは単に見るだけのものか、直接触ったりすることができるものかなどの度合いをいう。

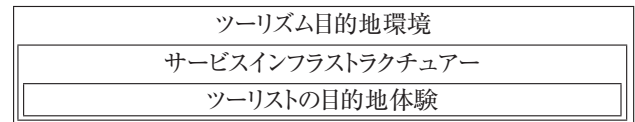


図3：ツーリズム目的地提供品（出所：N2, p.28）

以上のうえにたって、最後に『フィンランド報告書』は、フィンランドでは実態調査に基づく、実際には「サステイナブル・ウェルビーイング・ツーリズムの5段階モデル」で示されているところの、ウェルビーイング・ツーリズムの出発点になる「ウェルビーイングを支える資源と要素」においてさえ、ウェルビーイング・ツーリズムに適合したものにはなっていないものが多い。故にウェルビーイング・ツーリズムの考え方を発展・普及・展開させ、それに応じて充実を考えることが、さしあたり最低の課題と考えざるをえないと論じている（N2, p.35）。

IV. ウェルネスの今後の追求課題

本稿ではここで、冒頭で一言した、2016年の「グローバル・ウェルネス・サミット」で採択された、2017年以降におけるグローバルなウェルネスの8つの動向（8 wellness trends）（文献 G3：以下では『ウェルネスの8動向書』という）についてレビューする。ただしこれは、単なる動向というよりは、グローバル・ウェルネス・サミットとして取り組むべき課題というべきものであり、ここには現在世界的にウェルネスとして求められているものの大要が示されていると解される。8つの課題とは、以下のものである（G3, p.2ff.）。

第1は、「サウナのあり方を考え直し、作り直すこと（sauna reinvented）」である。サウナは北欧中心に盛んであるが、サウナは健康上良いものといわれている。事実1週間に2～3度サウナに入っている人は、死亡の危険度が20%ほど低いといわれる。今日ではサウナについて「ますます人々の間の交流を促進し、ますます楽しい思いができ、デザインのすばらしいコンセプトが盛んになるようになる」であろうし、なるべきである、としている。なおここでいうサウナには、日本の温泉等も含まれる（G3, p.7）。

第2は、「ウェルネスを向上させる建築を推進すること（wellness architecture）」である。これは、第二次世界大戦で戦勝した当時の英国首相チャーチルが「建物がわれわれを形作るから、われわれはまず立派な建物を作ろう」と言ったことを1つの理念とし、人々の健康や生活に役立つ建物を作ろうというものである。こうした観点からこれまでの建築の仕方を見ると、ごく一

般的には、建築家の独り善がりの基準でそれがなされ、利用者からいうと使い勝手がよくないものがあった。“建築的な美しさ”のみと追求した“病気の建物 (sick building)”というべきものもあった。これを、ウェルネスを生む建築とすることが、今後における“真に最も重要なウェルネスの取り組みの1つ”というのである。

第3は、「静けさ (silence) の実現」である。静けさはこれまでも人間の心身の健全性にとって必須の要因と考えられてきたが、近年のいわゆる情報革命によってもこの点での進展はあまりない。食事のときも含めて静けさを実現することが、依然としてウェルネスの大きな要因であるとする。「サイレントなスパに始まって、ウェルネスな修道院 (的なもの) の実現が、モットーになる」とし、日本の仏教の禅などが推奨例として挙げられている。

第4は、「芸術と創造性を中心とする (art & creativity take center stage)」ことである。この『ウェルネスの8動向書』によると、「18世紀末ごろから第二次世界大戦までにおいてはスパ・ウェルネス・療養と (芸術的) 創造性とは結び付きが強かった。しかしそれ以後はこの結び付きがほとんどなくなり、ウェルネスは、単に身体的な美とフィットネスのみを追うだけのものとなっている。(しかし少なくとも今後は) 芸術と、創造性すなわち精神性の向上がウェルネスにおいて経験され、かつ実践されるものとなって、これがウェルネスの中心的地位を成すようにする」(G3, p.20) ことが課題とされている。

これに関連し第5は、「ウェルネスは美を作り直すものである (wellness remake beauty)」というものである。これは、これまで長きにわたって美容業は、外面的な美しさのみを追求するものであったが、これを止め、全心的な美しさ (inside-out beauty; authentic, clean beauty; brain / beauty connection) の追求に切り替えることをいうものである。『ウェルネスの8動向書』は「美しさとウェルネスとの境界は、実は、はっきりしたものではない」と宣し、同書でいう真の美しさを実現するためには、いわゆる美容業界に根本的な考え方の変革 (seismic shift) が必要であるが、こうした真の美しさの実現のために必要な扱い高は、9,990億ドルにもなると提示している (G3, p.29)。

そこで第6に、「未来はメンタルなウェルネスのものである (the future is mental wellness)」という命題が提示される。これは、近年世界的に注目されている医療に対する批判、すなわち旧来的な医療方法は、人間の精神的な感情的な動きをふまえることなしに、すなわち人間の心の動きが身体各部位の動きに影響するものであることを無視して、診察がなされているという批判のうえにたつて、心的なウェルネスを重視すべきことをいうものである。ここでは、近年では仕事のうえでの生産性向上や、社会安定性の向上では、心の持ち方、つまり意欲のいかにが重要因子であると叫ばれていることが提議され、「メンタル・ウェルネスが将来における最大のトレンドになるであろう」と宣言されている (G3, p.32ff.)。

第7は、「癌患者と共にすること」(embracing the cancer-word)

である。『ウェルネスの8動向書』によると、ウェルネス事業者ではこれまで、誤解もあって、癌患者を敬遠することがないではなかった。これは、そうしたことを止め、そうした者について「医療を励まし、苦痛や悲しみを和らげ、積極的に回復に向かうようにする」ことをモットーとすることである (G3, p.43)。

第8は、「ウェルネス・エリート的なゲットを超えるようにすること (beyond the elite “Ghetos” of wellness)」である。これまでウェルネスは、所得や資産の不平等を反映したもので、いわゆる金持ちだけのものと考えられがちであったが、こうした誤解を打破し、ウェルネス・ツーリズムを含めて、より多くの人たち、なかんずく働く人々のものとなるようにすることである。

2016年「グローバル・ウェルネス・サミット」における8つの課題は以上であるが、これに関連し、近年のアメリカにおける動向を知ることを兼ね、かつ、ウェルネスにおける現在の課題を総括的に示すものとして、ここで、アメリカ・フロリダ国際大学のラスビー (Lusby, C.) が2015年の論文 (文献L) で提起しているところを紹介しておきたい。

ラスビーは、「ウェルネスおよびウェルネス・ツーリズムについて、一般に認められた定義はない」と確認したうえで、自らの実態調査に基づくと、ウェルネスと考えられているものは、要するに「ストレスの解消 (stress reduction)」、「自己回復 (reconnecting with themselves)」、「健康増進 (improving their health)」の3者で、一言でいえば、「心理的にウェル状態と感じていること (feeling well)」と「身体的にウェル状態であること (being well)」とが一致していること、つまりウェルネスとしては、「ヘルス一般 (general health)」というよりは、「心理的ヘルス (psychological health)」を追求するものであると提議している (L, p.27)。

V. 結—ウェルネス・ツーリズムの位置づけについて

以上において、現代ツーリズムにおいて生じつつある1形態であるウェルネス・ツーリズムについて論じてきた (以下本項では原則としてウェルネス・ツーリズムにはウェルビーイング・ツーリズムおよびヘルス・ウェルネス・ツーリズムも含む)。こうしたウェルネス・ツーリズムの進展の根拠について、ポルトガルのコスタ (Costa, C.) らは、本稿冒頭で一言した2015年の書において、次のように指摘している。すなわち「こうしたヘルス・ウェルネス・ツーリズムは、まさにヨーロッパで急速に進展中のものであるが、それは、端的には、ヨーロッパの人々の高齢化が進行していること、それに伴い元気で長く生存したいとする希望や、いろいろな活動を経験しておきたいとする願望が高まっている一方、健康を脅かす危険が種々起こっていることについて知覚が広まり、痛切に感じられるようになっていることから生じている」(C, p.23)。

これからわかるように、何よりもまず、ウェルネス・ツーリズムは、これまで主流であったレジャー活動享楽一辺倒的なツーリズムとは、旅行の意図・性格において異なるものである。すなわちこれは、ツーリズムでもこれまでのものとは異なった社会

経済的事情、従って時代思潮を反映したものとみるべきであると思われる。この点をどのように考えるべきか。最後にこのツーリズム形態の時代背景的位置づけについて、本稿筆者の見解を述べ、結語としておきたい。

ウェルネス・ツーリズムに関する論議は、およそ 1900 年代末～2000 年代初頭に起きたものである。顧みると、パッケージツアーという形で現代ツーリズムが生成したのは 1800 年代後半であったが (S2, p.4)、それが今日のように盛んなものとなり、マスツーリズムとして世界の耳目を集めるようになったのは、第二次世界大戦後の 1950 年代以降であった。すでに 1987 年にはブルントラント委員会報告書においてサステイナブル・ディベロップメントが提唱され、それまでの環境無視的な、ヘドニズム的欲求追求的なマスツーリズムに対する批判を高揚させる契機となってきた。

これらの動きを総括的にみると、これまでのツーリズムの根源的な時代背景的な基盤は、次のように、すなわち、1800 年代後半に始まる“現代ツーリズム生成”の時期は、現代ツーリズムの“モダン段階”、次の 1950 年代以降における“マスツーリズム進展”の時期は、“ポストモダン段階”として位置づけることができる。それ故、これをさらに延長して考えると、1900 年代末～2000 年代初頭以降のウェルネス・ツーリズム生成の動きは、“トランスモダン段階”のものと規定されうる。

トランスモダン (またはトランスモダニティ) 論は、1989 年にスペインのマグダ (Magda, R.M.R.) が提起して以来、世界的にいく人かの論者によりそれを敷衍もしくはさらに展開する試みが行われている (詳しくは Ω 3; Ω 4)。もともとマグダは、これをヘーゲル弁証法の“テーゼ→アンティテーゼ→ジンテーゼ”のトリアーデに土台をおくものとして、近代社会は“モダン→ポストモダン→トランスモダン”という発展形態をとると主張したものである。

これに立脚し、例えばツーリズム論でも著名な、オランダ・ワーニゲン大学のアテルイエヴィック (Ateljevic, I.) は、2013 年の論文 (文献 A2) で、ツーリズム理論においても、トランスモダン論に基づき今や、なんらかの形におけるポストモダン時代の終焉、それに代わるトランスモダン時代の到来を概念化することが必要と提議している。

ただしその場合アテルイエヴィックらは、トランスモダンとは何かについて統一的な概念形成はなされていない。そのなかにはトランスモダンという用語を使用していないものも含まれるべきである。ただしその場合トランスモダン論といわれるものに共通しているものがある。それは、ポストモダン論のような、人間のヘドニズム的な本能に基づく欲求充足は何事でも可とするところの、“なんでもあり主義”な考え方はいずれ排除され、これに代わって、人間理性に基づく行為が人間行為の当然のあり方となるような社会が現出する、と主張するところにあると提議している。

この点からすると、ウェルネス・ツーリズムの推奨論は、根本思潮的には、トランスモダン論志向的な 1 形態、少なくとも

その先駆け的な形態の 1 つとみることができる。極めて広い意味でこうした人間の本能のおよび健康的な欲求の充足活動を考えると、少なくとも理念的には、メディカル・ツーリズムは“モダン段階”に対応したもの、ヘドニズム的欲求追求的なマスツーリズムは“ポストモダン段階”に照応したものにとらえることができるが、これを延長して考えるならば、ウェルネス・ツーリズムは“トランスモダン段階”に照応したものといえることができる。

この考え方を、マグダの提唱したヘーゲルの“正—反—合”のトリアーデにあてはめると、[モダン=メディカル・ツーリズム] → [ポストモダン=ヘドニズム的マスツーリズム] → [トランスモダン=ウェルネス・ツーリズム] となるが、この考え方にたつならば、ウェルネス・ツーリズム論では、一方において例えば「パンパリング」批判あるいは旧来的建築理念批判という形で、ポストモダンに対する批判ないしは脱却が主張され、他方ではなんぞくメディカル・ツーリズムとの区別が力説されるゆえんが無理なく理解される。

ただしこの場合メディカル・ツーリズムとの関連でいえば、ウェルネス・ツーリズムは、いうまでもなくメディカル・ツーリズムに対し、区別を主張しているだけで、メディカル・ツーリズムを否定しているのでは全くない。しかしメディカル・ツーリズムとウェルネス・ツーリズムとでは、例えばツーリズム自体のあり様について、価値評価が異なる。

この点について 2015 年に、メディカル・ツーリズムについての実態調査に基づいて、メディカル・ツーリズムの根本要因はどこにあるかについて改めて提議している、チュニジアのガッロフ (Garrogh, K.) は、メディカル・ツーリズムでは究極的には関与する医師 (医療) の質がどのようなものかが問題となるのであって、その際のプロバイダー (例えばツーリズム業者) のあり様などは問題とならない。「こうしたものが (当該メディカル・ツーリズムの知覚された) 価値に対し決定的な影響を与えるものではないことは、はっきりしている」と述べている (G1, p.90)。

このことは、確かにメディカル・ツーリズムには妥当するが、ウェルネス・ツーリズムには妥当しないであろう。ウェルネス・ツーリズムではツーリズム自体のあり様、そのサービス活動の良否が重要な要因となる。というのは、ウェルネス・ツーリズムは、メディカル・ツーリズムの大衆化というべきものであるからである。この点からみても、ウェルネス・ツーリズムは、モダン段階ではメディカル・ツーリズムであったものがジンテーゼ的に発展したものである。メディカル・ツーリズムの発展形態であるが故に、その区別が肝要となる。

このように本稿で紹介したものでは、ウェルネス・ツーリズムとメディカル・ツーリズムとの区別を強調したものが前面にたつものとなっているが、しかし他方、既述で一言した「グローバル・スパ・サミット」の代表者、エリスのように、これまでの旅行では“食べ過ぎ (unhealthy over-eating)”や“飲み過ぎ (excessive drinking)”が多く、“旅行上でストレス (travel stress) 過重”になりやすいところの、ウェルでない (unwell) ものが多かったと評し、

それからの脱却を主張しているものもある (E, p.26)。ポストモダン的なヘドニズム追求的なツーリズムからの脱却論である。

ただしいうまでもなく、トランスモダンにおいて、こうした“非ウェルネス”的なもの、つまりポストモダン的なものが全くなくなるのではない。“トランスモダン”的なものが主流となるだけである。“モダンのもの”がなくなるのではないのと、同様である。

こうした動き、すなわちツーリズムでも“トランスモダンのもの”が生えつつあることは、世界観光機関 (UNWTO) の2016年の文書でも言及されている。同文書のタイトルは、『ツーリズムの変革的な力 (transformative power) についてのグローバルな報告書: 旅行者により強い責任を求める方向におけるパラダイム転換』(文献U) といふが、同文書は、世界的にみた場合ツーリズムについてより責任あるものであることを求める論調が極めて強いものとなっていることを力説している。そしてこうしたツーリズムの転換を求める根拠である論調の1つに、トランスモダン論があることを挙示し (U, p.14, p.17)、参照文献としてアテルイエヴィックの論考を挙げている。「トランスモダン論」は、ツーリズム論でも今や世界的に公知の論調である。この視点なくして、ツーリズムの今後は論じられない。

さらにインターネットでみると、明らかにフィンランドで発表されたものと思われるが、「ポストモダン・ウェルネス・ツーリズムからトランスモダニティへ。フィンランド・ウェルビーイング・ツーリズムの解釈と今後の予測」というタイトルの論考 (文献R2) が発表されている。

なお本稿の内容について地域別にみると、既述のように、ヨーロッパを中心に北ヨーロッパが主たる対象になっているが、『2011年グローバル・スパ・サミット報告書』(G2) において「ウェルネス・ツーリズムとメディカル・ツーリズムについてのケーススタディ」の対象とされている国は、オーストラリア、オーストリア、ブラジル、カナダ、ハンガリー、インド、インドネシア、ヨルダン、モロッコ、フィリピン、南アフリカ、タイの12か国である。しかもこれらは単に、現在の世界的動向を示す例的存在として取り上げられているだけのものである (G2, p.38)。ウェルネス・ツーリズムは今や全世界的で普遍的に盛んになっているものである。

参考文献

- A1: Ardell, D.B. (1986), *High Level Wellness*, 2nd ed. Berkeley: University of California Press.
- A2: Ateljevic, J. (2013), Visions of Transmodernity: A New Renaissance of Our Human History, *Integral Review*, Vol.9, pp.200-219.
- C: Costa, C., Quintela, J. and Mendes, J. (2015), Health and Wellness Tourism: A Strategic Plan for Tourism and Thermalism Valorization of São Pedro do Sul, in: Peris=Ortiz, M. and Álvarez=García, J. (eds.) (2015), *Health and Wellness Tourism: Emergence of a New Market Segment*, Heidelberg: Springer, pp.21-31.
- D: Dunn, H.L. (1959), High-Level Wellness for Man and Society, *American Journal of Public Health*, Vol.49, pp.786-792.
- E: Ellis, S. (2013), The Global Wellness Tourism 2013: ITB Experts Forum Wellness, retrieved on July 10, 2017, from http://itb.kongress.de/media/ibk/arciv_2014/ITB_Experts_Forum_Wellness-Tourism.
- G1: Garrough, K. (2015), Medical Tourism: The Impact of Service Quality, Price and Perceived Risk on Perceived Value and Behavioral Intentions, *The Macrothem Review*, Vol.4, pp.81-95.
- G2: Global Spa Summit (2011), *Wellness Tourism and Medical Tourism: Where Do Spas Fit?* www.globalspasummit.org.
- G3: Global Wellness Summit (2016), *8 Wellness Trends for 2017—and beyond: As Identified at the Global Wellness Summit*, www.global-wellnesssummit.com.
- H: Horwath HTL (2014), *Health and Wellness Market Report Germany*, www.horwathhtl.co/ 2014-Horewath-htl/Health-and-Wellness-Market-Report-Germany.
- J: Jagyasi, P. (2006), *Wellness Tourism Guidebook*, retrieved on July 10, 2017, from <http://www.deprem.com/wellness-tourism-guide/what-is-wellness-tourism.html>
- K: Kaspar, C. (1996), Gesundheitstourismus im Trend, *Jahrbuch der Schweizer Tourismuswirtschaft*, 1996, S. 53-61.
- L: Lusby, C. (2015), Perceptions and Preferences of Wellness Travel Destinations of American Travelers, *Journal of Tourism and Hospitality Management*, Vol.3, pp.23-28.
- M1: Mueller, H. and Kaufmann, E.L. (2001), *Wellness Tourism: Market Analysis of a Special Health Tourism Segment and Implications for the Hotel Industry*, Bern: Research Institute for Leisure and Tourism at University of Bern.
- M2: Murphy, P., Pritchard, M.P. and Smith, B. (2000), The Destination Product and Its Impact on Traveller Perception, *Tourism Management*, Vol.24, pp.43-52.
- N1: Nordic Innovation Centre (2011), *Innovation and Re-branding Nordic Wellbeing Tourism: Final Report from a Joint NICE Research Project*, www.nordicinnovation.net.
- N2: Nordic Innovation Centre (2011), *Wellbeing Tourism in Finland: Finland as a Competitive Wellbeing Tourism Destination*, www.nordicinnovation.net.
- P: Peris=Ortiz, M. and Álvarez=García, J. (eds.) (2015), *Health and Wellness Tourism: Emergence of a New Market Segment*, Heidelberg: Springer.
- R1: Ritchie, J.R. and Crouch, G.I. (2005), *The Competitive Destination: A Sustainable Tourism Perspective*, Wallingford: CABI.
- R2: reference: From Postmodern Wellness Tourism towards Transmodernity, Interpretation and Predictions of the Finnish Wellbeing Tourism, retrieved on July 10, 2017, from <http://www.thebox.fi/up-content-uploads/2016/11/from-postmodern-tourism-towards-tansmodernity.html>
- S1: Sheldon, P. and Park, S.-Y. (2009), Development of Sustainable Tourism Destination, in: Bushell, R. and Sheldon, P.J. (eds.), *Wellness and Tourism. Mind, Body, Spirit, Place*, New York: Cognizant Communication, pp.99-113.
- S2: Singh, T.V. (2015), Introduction, Singh, T.V. (ed.), *Challenges in Tourism Research*, Bristol: Channel View Publications, pp.1-15.
- U: UNWTO (2016), *Global Report on the Transformative Power of Tourism: A Paradigm Shift towards a More Responsible Traveller*, Affiliate Members Report: Volume fourteen, published by UNWTO and the Institute for Tourism, Zagreb: Croatia.
- W: Wellness ist Zukunft! Rückblick auf den 10. Global Wellness Summit 2016, abgerufen am 10 Juni 2017, aus <http://www.spacam.net/2016/10/global-wellness-summit-kitzbuechel-2016-wellness>.

- Ω1: 大橋昭一（2001）「ドイツ語圏における観光概念の形成過程—ドイツ観光経営学研究の1章」『大阪明浄大学紀要』1号、11-21 頁
- Ω2: 大橋昭一（2002）「第二次世界大戦後ドイツ語圏における観光概念の展開過程—観光事業経営学のための特徴的諸論点を中心に」『大阪明浄大学紀要』2号、2-14 頁
- Ω3: 大橋昭一（2014a）「トランスモダニティ論の勃興—現在社会をどうとらえるか：その基本的一類型」『和歌山大学・経済理論』376号、103-128 頁
- Ω4: 大橋昭一（2014b）「ポストモダンからトランスモダンへ—現在社会のとらえ方の転換点」『和歌山大学・観光学』11号、1-12 頁
- Ω5: 大橋昭一（2017a）「国連提唱型サステイナブル・ディベロップメントの進展過程—根本原理的特色を中心にした考察」『和歌山大学・経済理論』387号、33-49 頁
- Ω6: 大橋昭一（2017b）「持続的発展についての考え方—サステイナブル・ディベロップメントとサステイナブリティとの異同を中心に」『和歌山大学・観光学』16号、13-23 頁